

2月3日

ヨーロッパの殉教者

Ἅγιος Βλάσιος

(~316)

～アルメニアの伝説的聖人～



「聖ブラシウス」

ハンス・メモリンク画

聖公会では「ヨーロッパの殉教者」を祝うこの日は、カトリック教会ではアルメニアのセバステの司教で殉教したブラシオスを覚える日となっている。そこでここでは、ブラシオスを紹介したい。

ブラシオスは3世紀に現在のトルコの北西部にあるアルメニアのセバステで生まれる。幼い時から信仰深く育った彼は、医者となってその生計を立てるが、彼の人柄を高く評価していた地元の聖職者や信徒たちにより、309年、司教になる。

彼のもとにはたくさんの病人が連れられて来た。魚の骨が喉につかえて窒息死しそうになった子どもを奇跡的に救ったり、畜牛の病気の際に加護の祈りを行ったりした。そのため、病気、ことに喉の障害の救難聖人や羊毛のすき手の守護聖人として崇められている。

さて、この当時、4世紀初期にもキリスト教への迫害は行われており、ブラシオスの元にもその手は及ぼうとしていた。そこで彼は迫害を逃れ、ほら穴に身を隠しながら司牧を続けていく。その彼に獅子や虎、狼までもがなついていたという。

しかし、316年、ほら穴で祈っていた彼のもとに総督の部下が偶然訪れ、彼はつかまってしまう。総督はブラシオスに棄教をすすめるのだが彼は応じず、柱に縛りつけられ、鉄の熊手で体をひき

裂かれたりもした。それでもブラシオスは神を賛美し続け、遂に総督により、首を切られることとなる。

彼の首が切られることを知った人々のうち、七人の婦人は彼の傷口に布をあて、聖人の遺物にしようとするが、逮捕され首を切られてしまう。

またブラシオスが首を切られる時、彼は「主よ、わたしの世話になった者や、わたしの取り次ぎを願う者のために特別お恵み下さい」と祈ったと言われる。

彼の殉教後、ブラシオスの取り次ぎで多くの病者は癒され、罪人は改心していった。中世以来、ヨーロッパ各国ではブラシオスの掩祝(えんしゅく)を与える習慣が生まれる。それは、司祭が二本のろうそくを十字に組み信者の喉にあてがい、片手で祝福を祈るというものである。(Y)

<特禱>

全能の神よ、あなたは証びとを召して国々、ことにヨーロッパに遣わし、その生涯によって栄光を現されました。どうか殉教者たちとの交わりが強められ、わたしたちもその模範に倣い、感謝して忠実にみ国のために働くことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン